

ソーシャルワークにおける倫理の根源的課題

— 良心が応える

佐藤 俊一[※]

この小論は、ソーシャルワーカーの倫理の根源的課題を明らかにしようとするものであるが、同時に、それは現代の対人にかかわる専門職の共通する倫理課題となる。なぜなら、倫理とは、ある領域の専門職の行動規範ではなく良心の問題となるからである。

この度改訂されたソーシャルワーカー倫理綱領の前文における3つのキーワード、人間としての尊厳、価値ある存在、平等の理解について、自明とされている考えを現象学の視点から明らかにし、ソーシャルワーカーが実践できるようにすることを試みている。続いて原理に示されている人間の尊厳と多様性の尊重、集団的責任、スピリチュアルな側面の実現のために人間の基本的な理解、個人と社会の両立する関係を検討し、根源的課題に取り組むためには、スピリチュアリティの覚醒がソーシャルワークの支援に必要なことを論じている。

キーワード：かけがえない存在、役に立たないこと、存在の次元、集団の応答、スピリチュアリティの覚醒

はじめに

テーマである倫理とは、価値や規範を表している。そのため、その時代や社会における人間の生きる態度を検証することで、価値や規範が、人間の可能性を実現させるものになっているかを検討することが基本的課題となる。その過程の中で社会に対する視点と、個々が社会をどのように受けとめ、生きるかという双方向のあり様が見えてくる。この両者の視点を正しく理解しておくことが必要となる。

たとえば、多くの現代人は「幸福を追求する」「自己実現を求める」といったことを目標に掲げ、実現するための手段を持つとする。そうした発想は、国が異なっても社会に共通してみられる価値を表している。多くの人は経済的に、あるいは社会的役割において、さらには様々な生

※ 淑徳大学大学院総合福祉研究科 総合福祉学部教授

活手段を豊富に所有することで、幸福になることができている。そして、たくさんのモノを所有している人は、一見すると幸福であり、自己実現しているかのように見える。ところが、本人が実際にどのように感じているかという問題と、それ以上にそこには、私たちが人間の生きる態度をどのように考えているかという基本的な問題がある。なぜなら、自分以外のモノを大切にし、それらをいかに多く所有しようとも、「自分が自分らしくなる」、あるいは「自分が自分である」ということとは全く別のことだからである。そして、そうした問いかけは、今度は社会の価値を問いつけることにもなる。

ここでは、ソーシャルワーカーという一つの専門職の倫理を論じることが、テーマである。なぜ、あえて最初に基本となる人間の理解の問題をとりあげたかと言えば、倫理の根源にある価値が明らかになるからである。自分たちの生きる態度を明らかにしないで、または横に置きやることで論じることでは意味がない。まずは、私たち自身の価値に対する考えを明らかにすることである。そのことを確認することで、倫理の問題を論ずるときに陥りがちな「あるべき姿や理想だけを示す」ことだけで満足しないようにすることができる。

1. 倫理とは

(1) 理想と慣習

議論の順番として、ソーシャルワーカーにとっての倫理を考える前に、まずは倫理そのものが意味していることを明らかにする必要がある。実践現場においても「その問題は倫理的な観点から検討する必要がある」と指摘され、職能集団や研究者から「専門職にとって倫理綱領を持つことが大切だ」とも言われる。そこでは自明なこととして倫理の問題が大切だとされているが、では倫理そのものが意味することは明確にされ、共通の理解は得られているのだろうか。

まずは、倫理の基本となる問題を、倫理と心理に対して疑問を抱かせることを行ったフロム(Fromm, E.)の考えを紹介しながら検討したい。フロムによれば「倫理(ethics)という語は、元は慣習(custom)を意味する語根から出てきており、やがて、それは人間の関係性の諸理想を扱う科学を意味するようになった」(Fromm=1965:88)ののだが、そこに倫理の問題に対する混乱があると指摘する。つまり、一方では「無意識的に慣習として一般に受け入れられていることとされ、他方では、意識的に理想としてすべきことだとされているのである。後者のすべきことが、前者の受け入れられるということによって、慣習は善であり、正しいこととされる」(同:88)ことになる。その結果、ある状況や専門職の集団にとって、多くの人や場合に受け入れられていることが倫理として示されるのである。これが倫理の問題を考えるさいの「最も安楽な解決である」(同:88)とフロムは指摘する。

こうした発想の下に、倫理が考えられ、それに基づいて職能集団の倫理綱領などが作成され

ば、そこには十分に吟味されていない倫理の考えがあり、フロムの言う「無意識的に受け入れることは正しい」という考えがそのまま残ることになる。そして、作られた倫理綱領を遵守すれば、倫理的な問題は解決できると錯覚することが起こる。問題なのは、多くの人に受け入れられているかではなく、私たちが問題に直面したときにその一回性のなかでどのように決断するかなのだが、その決断するという責任から逃れる道を作り出さないように注意する必要がある。

(2) 職業倫理の位置づけ

ここで考えるのは、ソーシャルワーカーの倫理であり、それはソーシャルワークにかかわる人たちの職業倫理だということができよう。したがって、ソーシャルワーク実践という特定領域、またはその状況にあてはまる行動の規定である。関係する専門職をみていくと、医師（医の倫理綱領）、看護師（看護者の倫理綱領）、ソーシャルワーカーにとっては社会福祉士（社会福祉士の倫理綱領）などそれぞれの職業ごとに定められており、それぞれの特性を反映したものが作られている。それは、社会においてそれぞれの専門職の力を適正に役立たせる為に必要なものである。他方で、ここで考えなければならないのは、たとえ分野が異なったとしても、人にかかわる仕事をする専門職に共通する原点となるものがあるのではないのだろうか。そうした観点から考えれば、フロムが強調するように倫理とは、ある領域の多くの人たちに受け入れられることで生じる特定の領域にあてはまる行動の規定ではなく、私たちの生きる態度を示すものである、ということができよう。したがって、倫理が示す基本的な課題は、すべての人間存在にあてはまることになり「倫理とは規則（code）ではなく、良心（conscience）の問題」（同:89）となる。この根本となることを理解して、個々の職業倫理を考える必要がある。

(3) 倫理が問いかけること

良心の問題として倫理を考えるには、私たちが生活のなかで日々繰り返している生きる態度を明らかにする必要がある。冒頭に指摘したようにモノを所有することで自分の人生を意味あるものにしてしまうと考える人たちは、気がついてみるとすべてのことをモノ化する態度で見ている。フロムは、「〈人間はものではない〉という声明は、現代人の倫理的問題の中心的論点だと」（同:102）指摘する。たとえば、ソーシャルワーカーにとってサービスの利用者という捉え方をするとき、実際には個々のクライアント一人ひとり、たとえば小島さん、山口さんという個別性を理解することが基本になるのだが、認知症の利用者とか問題ケースというカテゴリー化された発想でみなすとき、そこにはすでに対象としてモノ化する態度が表れている。このように相手を知り、そして応えるという基本的なことが、人にかかわる仕事をする人にとっての倫理的問題として表れる。つまり、対象化されたモノとして知るのではなく、関係において相手をわかるということは、相手を知ると同時に自分がどのように相手に関わっているかを気づくことで自分を知ることになる。

その一回，一回の過程を大切にすることで，たとえ同じような出来事や課題を抱えた利用者であっても，新たな発見が常に可能であり，そのコミットする創造力が支援者を生き生きとさせる。

このように考えると，倫理の問題としてモノ化する態度を克服することで利用者や支援者がモノではなく，お互いが絶えず生まれる関係となることが可能となり，創造的な関係になることがわかっていく。他方で，私たちが，これからソーシャルワーカーの倫理，具体的には倫理綱領を検討していくときにも倫理綱領を作った，あるいは持っている，知っているという態度によって，モノ化することが起こる危険がある。そのため，倫理綱領を持つとは，ソーシャルワーカーが自らの責任を明確にし，より自分たちが責任を問われることになるのだということを忘れてはならない。

2. ソーシャルワーカーの倫理の基本的理解…対人援助における根源的課題

日本ソーシャルワーカー連盟代表者会議において，「ソーシャルワーカーの倫理綱領」の改正案が承認された。(2020年6月2日改訂)。また，その前文において，「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」が実践の拠り所とすると明示されている。ここでは，基本となる考えを実践できるようにするにはどうしたらいいのかを，今回改正されたポイントに着目して基礎づけることを試みる。

前文

われわれソーシャルワーカーは，すべての人が人間としての尊厳を有し，価値ある存在であり，平等であることを深く認識する。われわれは平和を擁護し，社会正義，人権，集団的責任，多様性尊重および全人的存在の原理に則り，人々がつながりを実感できる社会への変革と社会的包摂の実現をめざす専門職であり，多様な人々や組織と協働することを言明する。

われわれは，社会システムおよび自然的・地理的環境と人々の生活が相互に関連していることに着目する。社会変動が環境破壊および人間疎外をもたらしている状況にあって，この専門職が社会にとって不可欠であることを自覚するとともに，ソーシャルワーカーの職責についての一般社会および市民の理解を深め，その啓発に努める。

われわれは，われわれの加盟する国際ソーシャルワーカー連盟と国際ソーシャルワーク教育学校連盟が採択した，次の「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」(2014年7月)を，ソーシャルワーク実践の基盤となるものとして認識し，その実践の拠り所とする。

(下線佐藤)

<http://www.japsw.or.jp/syokai/rinri/sw.html>

まずは、上記の前文を確認してみよう。最初の人間としての尊厳、価値ある存在、平等を深く認識することについては、従来の内容が引き継がれている。平和を擁護し、の以下が拠り所とされているグローバル定義の原理として示していることと重なることがわかる。

この論文において目指すことは、ある領域における行動規範を示す職業倫理ではなく、人間存在に根ざす根源的課題を示す倫理である。そうした意味では、特に前文の引き継がれている3基本項目については、まさしく職種に関係なく対人にかかわる専門職にとって共通の課題となろう。以下に、順次検討してみたい。

(1) 人間としての尊厳について…永遠に求めるもの

現在進行している新型コロナウイルスとの共存においても、いろいろな局面で人間としての尊厳が問われている。最も顕著なことは、死を前にしてもパートナーを始めとして誰とも会えずに、別れを迎えるという問題である。医療関係者の献身的な努力によって感染予防をするなかでの治療が行われている。そうした中で、対応に限界があることはわかるのだが、やはりここで個々の生の尊厳を改めて検討する必要があることもわかっていく。

愛する人が、どこか知らないところで突然の死を迎えたというのであれば、最後に会えなかったということはわかる。また、これまでも会えるのに、悩みながらもあえて会わないという選択をした人がいるだろう。ところが、今回は相手が死の前にいて、パートナーはそのことがわかっており、しかもすぐ傍にいて会えないのである。こうしたことは、今まで体験しなかったことである。このように新型コロナウイルスは、死を前に生きる人と別れを迎える人の両者にとって、人間としての尊厳を守るにはどうしたらいいのか、新たな問いを突き付けている¹⁾。

科学的な対応をする、これまでの経験から学んだことを活用することは必要なことである。しかし、人間の尊厳を守るとは、新たな問題と向き合う中で、私たちが具体的にどう応えていくかである。そこに見えるのは、「人間は未完成である」(Fromm, E.=2010:94)ということである。したがって、尊厳を守ることができるか常に試されているのだが、私たちは、未完成であるがゆえに矛盾を乗り越えるための決断をしていくしかない。まさしく良心が問われているのである。そして、完全に乗り越えることができないのが、未完成な人間の運命なのである。

(2) 価値ある存在について…役に立たないこと

価値についても、自明としていることを問いかける必要がある。ポイントは、多くの人が文化的・社会的次元の価値に染まっており、社会的に役に立つこと―「有用性」に価値を見出そうとしていることにある。そのため社会や組織に役立つということが、行動の指針となる。また、科学的な思考は個別な事象ではなく一般化できること―「効用性」に価値を求めている。汎用性と言ってもいいのだが、人間に当てはめると代わりがきく、同じようにできる人をたくさん用意で

きるとよいという考えである。

以上のような状況に対して、病気や障がいによって、それまでのように仕事ができなくなっても、ただ「いる」ということで価値があり、また人間関係の中で新たな価値を見出すことは可能である。同様に、効用性がなくても個別なことに価値を見出すことは可能である。むしろ、科学とは逆に取り代えがきかないこと、つまり、個々のかけがえのなさに価値を見つけるのである。

更にもう一步深めてみたい。おそらく西欧的発想と私たち東洋、正確には日本と言った方がいいと思うが、価値に対する捉え方のちがいがあ。たとえば『夜と霧』で著名なフランクフル（Frankl, V.）は、価値には創造価値、体験価値、態度価値の3つがあるとし、たとえ仕事ができない（創造価値）、本を読めない（体験価値）と2つ価値実現ができなくても、人生に苦悩する中で態度価値の実現可能性に開かれていると説く（Frankl, V.=2005:111-115）。ソーシャルワークにおいても、価値ある存在と言うとき、このフランクフルの示す態度価値については共有できるだろう。ただし、そこに社会や組織に役立たなくても、誰かの役に立つという価値があることに気づいてしまう。

他方で、宗教哲学者の谷口隆之助が示すように、私たちは文化的・社会的次元における価値を失ったとしても、存在としての次元を生きている。そこでは代理不可能な存在の私、本来は無用者だということ。つまり自分は何か社会的に役に立っている、そう思って、そのことに存在価値を見出しているかもしれないが、自分の身についているものを剥ぎ取っていくと、最終的にはみな平等であるということがわかる。つまり、何かのために苦しんだり、悩むのではなく、「贈りたいのちに生きている自己、その自己が生きて、そして悩み苦しむときに、単に自己が悩むべきことを悩む、苦しむべきことを苦しむのだ。苦しみがなくなることがよいのではない、悩みがなくなることがよいのではない。そういう苦しみのなかにありながら、そのなかに両手を広げて生きていくことが根本なのだ。」（谷口 2000:163）という谷口のことばは、むしろ役に立たない存在であり、何もできないことのなかに本来の価値が見え、そこにおいて私たちは、一人ひとりを大切にできると教えてくれている。

（3）平等の理解について…均等ではない

このテーマが原理として示されている「多様性」と結びつくのだが、実践的に理解しようとすると難題となる。というのは、本来、平等においては個別性を尊重することになるのだが、今日では平等というとき、むしろ多様性を表す個性を明確にしないで「均等」であることが重視されるからである。

なぜ、上記のような考えが一般化したのか。一つには、フロムが指摘するように「交換価値」によって人間が扱われるようになったからである。市場でモノを交換するのと同様に、人間がキャリアや仕事の量によって評価される。そこで大切なのは、個々の人格ではなく、あくまでも市

場での評価であり、交換価値があると認められることである。フロムは、人間が平等 (equality) であるという観念は、それ自体が目的であって手段ではないという権利を持っていると示した後「今日では平等とは交換がきくと同じ意味をもち、正に個性を否定する観念である。」と指摘し、その結果「平等は相違 (difference) と結びついていたのだが、反対に無差別や無関心 (indifference) を表しており、それらが自身や他者との関係の特徴になっている」(Fromm, E.=1955:99) と論じるのである。個別性が忘れられ、歪められたものによっていることがわかってしまう。

ソーシャルワーカーは、実践においてクライアントと平等な関係を作り、どのように仕事をしているのだろうか。一般的な例として業務を前に進めるために支援の目的へ忠実に、クライアントから、また所属する機関や他職種からの期待される役割を行っていることがあげられる。組織において機能的に求められる仕事の範囲に留まっていれば、均等な関係を維持できる。そうした場合には、クライアントに対しても同様の態度を求めていることが多いだろう。しかし、その裏側に本気になってかわり、自分の感じていることや今の自分をすべて表してしまうと、お互いの均等な関係が崩れてしまうことを恐れていることがわかる²⁾。やはり、個別性が損なわれて平等になっているのだと言えよう。

では、フロムが言う平等という考えが目的であるとは何を指しているのだろうか。それは、価値において指摘したように、社会的役割を剥ぎとっていくと見えてくる。そこでは、一人ひとりの個性や独自性も明確になる。仏教には「凡夫」という言葉がある。凡夫というのは、悟りを開いていない人のことである。私たちは日々いろんな俗世界の欲にまみれて生きているので、そうした意味でいうと、みんなが凡人である。凡人ということで、人間はみんな平等ということになる³⁾。これに関連して、ユダヤ人のフランクルが、人間はみんなが「不完全である」と指摘し、「人間は不完全なことによってその人らしさ、独自性がある」(Frankl, V.=2005:111-115) という。つまり、もし人間がみんな完全な人になったら、完全という意味でみんな同じになってしまう。そして、誰もが不完全だという意味で平等になる。不完全な人間が一所懸命に誠実に生きている、その生きざまは代替不可能であり、そこに一人ひとりの独自性が表れるのである。

3. 幾つかの原理の実践的課題

倫理の大前提になることについて、一般的に自明とされていることを中心に基礎づけることを行った。この基礎づけとは観念のためではなく、実践するために必要な作業である。つまり、理想となることを示して満足するのではなく、個々のソーシャルワーカーが実践において、どのように取り組んでいるかを明らかにすることである。そして、できていないことを明らかにすることで、新たな取り組みが生まれることになる。そのことが、冒頭に示した倫理に内在する慣習と理想の壁を越えていく道となる。

ここでは、改正が行われた倫理綱領の幾つかの原理を実践化に向けて検討してみたい。具体的には、人間の尊厳と多様性の尊重、集団的責任、最後に新たに加わった全人的存在としてかかわるためのスピリチュアルな側面である。特に、最後のスピリチュアリティにかかわることは、いろいろな領域で注目されており⁴⁾、チームアプローチにおいても共通の理解が得られると支援がクライアントに確かなものとして伝わるようになるだろう。

原理

I（人間の尊厳） ソーシャルワーカーは、すべての人々を、出自、人種、民族、国籍、性別、性自認、性的指向、年齢、身体的精神的状況、宗教的文化的背景、社会的地位、経済状況などの違いにかかわらず、かけがえのない存在として尊重する。

II（人権） ソーシャルワーカーは、すべての人々を生まれながらにして侵すことのできない権利を有する存在であることを認識し、いかなる理由によってもその権利の抑圧・侵害・略奪を容認しない。

III（社会正義） ソーシャルワーカーは、差別、貧困、抑圧、排除、無関心、暴力、環境破壊などの無い、自由、平等、共生に基づく社会正義の実現をめざす。

IV（集団的責任） ソーシャルワーカーは、集団の有する力と責任を認識し、人と環境の双方に働きかけて、互恵的な社会の実現に貢献する。

V（多様性の尊重） ソーシャルワーカーは、個人、家族、集団、地域社会に存在する多様性を認識し、それらを尊重する社会の実現をめざす。

VI（全人的存在） ソーシャルワーカーは、すべての人々を生物的、心理的、社会的、文化的、スピリチュアルな側面からなる全人的な存在として認識する。

（下線佐藤）

<http://www.japsw.or.jp/syokai/rinri/sw.html>

（1）人間の尊厳と多様性の尊重…存在の次元での問い

原理に示されている1. 人間の尊厳は、前文でも冒頭で触れられているように、最も根源的な課題である。2. 人権を含めて他の課題と関連しているが、ここでは5. 人間の多様性と関連させて検討したい。なぜなら、本文でも強調されている「かけがえのない存在」として尊重されること、独自性の尊重には、多様性の尊重（respect for diversities）という課題があるからである。

社会で生活をしていくこととは、多様性にかかわる個人のちがいでだけでなく、家族で、また地域のなかで、また地域による多様性がある。日本においても新型コロナウイルスによって、医療関係者や感染した人や家族に対して誹謗中傷が起こっている。もちろん、それを是正しようとする

る動きもあるが、これと同じようなことが何度も繰り返されるし、これから起こることが予想できる。感染した、または可能性のある人たちをグループ化し排除するという行動は、裏側に感染していない人たちを主として、目には見えないが、心理的には同一のグループへ帰属することで安心したいのである。そして、グループを、そして自分を強化するための手段として、異なるものを差別の対象とする。

もともとウィルスは外側からやってくる脅威であったのだが、感染することによって内側に存在することになり、最終的には個人の存在そのものを否定する行動となる。人種差別においても、同様なことが起こる。最近（2020年5月）でもアメリカ合衆国ミネソタ州で警察官の黒人に対する不当な暴力行為によって若者を死に至らしめたことが世界的に反響を呼んでいる。問題は人種のちがいがということが前提にあり、目に見えるものだが、それが個人の生命を奪い取るものまでになってしまう。問題を難しくするのは、見えるものによって起こった差別が、個々の生という見えないものであるが、最も大切なものを冒涇することである。当然のことだが、尊厳における人種や民族のちがいがいかかわらず「かけがえのない存在」(irreplaceable existence)として尊重することと相容れない。また、そのことが地域社会においてどのように捉えられるかが焦点となり、合衆国においても今までにない動きと報道されている⁵⁾。私たち一人ひとりの存在は、取り代えができないという意味でかけがえがない。平等において指摘したように、かけがえのなさとは賞賛されることだけではなく、不完全さにある。フランクフルも指摘するように「人間は不完全だからこそ、全ての個人は欠くべからざる存在であり、他と交換することのできない存在なのである」(Frankl, V.=2005:153)と言えよう。

倫理の原理としての尊厳とは、目に見えるものを差別しないことだけではなく、存在にかかわるところまでコミットメントし、見ることである。「目に見えるものや対象としてとりあげられることは、科学的に対処しやすいし、また取り組みを可能とするだろう。しかし、自死を始めとして、本項で取り上げている一人ひとりの多様性を尊重することは、科学的には対応できないことを私たちに突き付ける。」(佐藤 2020:91-94) そのため、ソーシャルワーカーは、実践においてクライアントの尊厳を守る機会に直面するのだが、その際に目を開いて一人ひとりの生と向き合い、実践のなかで実証できるかが常に問われている。

(2) 集団的責任…個人が、集団が応答する

この原則は、特に日本の文化における集団主義とも関連して理解が難しい。原理的には、文化の違いにかかわらず、個人と集団という二元論があり、一般的には集団の力が大きいことが強調される。個人は社会や組織の前では小さな存在であり、大抵の人は、自分がうまく適応する、孤立しないためにはどうしたらいいかを考える。そうした状況とは、ブーバー (Buber, M) よれば「人格は、個人的な決断と責任を断念することによって自分自身を放棄している」

(Buber=1961:172-173) ことになる。つまり、個々人は自分で社会や組織にかかわることを何も決定しないで、従う。そのことで責任を逃れているのだが、それは自分を人間が作り出した組織に一体化させる(偶像崇拜)ことで生きているだけである。まさしく、前文にある人間疎外に陥っていることになる。

上記のような状況においては、集団的責任(collective responsibility)とは、個々人とは関係なく単に社会のシステムや法律に基づく内容をイメージすることになるだろう。個人の責任から逃れているところでは、社会も決まりきった責任しか果たしてくれない。必要なのは、個人が自分で決断できることであり、それに応じるかたちで社会の責任が明らかになり、人々の間で共有化できることである。たとえば、私たちは社会的役割なくして生きることができない。ところが誠実に組織や人にかかわると、期待されるようにできないという課題に必ず直面する。役割は私たちを不自由にするのだが、そこで個人がどのような行動をとれるのかが問われ、自由に生きることが可能となる社会かが明らかになる。面白いことに「困難となる必然性が多くなればなるほど、自由も多くなる」(Kwant R.=1984:160-161)のである。そうした個人と社会の関係とは、現実には難しいし、実現できないと思われるかもしれない。しかし、不可能ではない。先に確認したような「かけがえのない存在」としての個人になるとは、私たちの外側にある既成の社会ではなく、人間によって創り出される共同体において可能となる。ブーバーは「一方においては人格了解の変革へ、他方においては、共同体了解の変革へと前進しうる出発点が与えられる」(Buber=1961:177-178)と指摘する。ここにおいて、グローバル定義の解釈において示されている「ソーシャルワーク専門職は、人権と集団的責任の共存が必要であることを認識するのである」ということの理解ができる。

原理に示されている集団的責任の、特に集団という側面を理解しようとする、これまで示してきたような議論が最低限なものとして必要である。その上で責任を検討して、初めて集団的責任について言及できよう。倫理の課題を人間の本性の理解から基礎づけようとしたフロムは、「責任とは外から課せられる義務なのではなく、私が当為を感じる私自身の関心事に対する、私の反応(response)である。……すなわち、責任をもつとは応答の準備がある、という意味である(傍点佐藤)」(Fromm E.=1955:126)と強調する。そして、応答することによって、個々の責任を果たしていくことになる。

個の責任を一人ひとりが果たすことが、今度は集団の責任を明らかにし問いかけることになる。そうした共同体においては、いわば集団に応答の準備があり、応答しメンバーを受けとめることで責任を果たすのである。集団の押し付ける力ではなく、個々が主体的に動けるような力になることで互恵的な関係の実現ができる。そうした集団的責任が生まれるように、ソーシャルワーカーが行動することによって、簡単ではないがグローバル定義の注釈にあるように、「ソーシャルワークの主な焦点は、あらゆるレベルにおいて人々の権利を主張すること、および人々が互いのウ

エルピーイングに責任をもち、人と人の間、そして人と環境の間の相互依存を認識し尊重するように促す」ことが可能となるのである。

(3) スピリチュアルな側面…スピリチュアリティを目覚めさせる

新たにスピリチュアルな側面に着目して、全人的な存在として人間を理解することが取り入れられたことは画期的なことである。というのは、ソーシャルワーク実践とは、人間が生きていくなかで避けられない不幸や不安といった人間的体験とどのように向き合うかが、根本に常に問われているからである。平穩無事に生きているときには見えないその人自身が、不安に揺さぶられているときにハッキリと表れる。たとえば、新型コロナウイルスによって、先が見えないこと、予定が立たないこと、また自粛が求められて人と会えないことを私たちは新しく体験した。医療現場では、医療従事者は、自分の生命の危険を感じながら治療を行っている。政府が要請する「新しい生活様式」を実践する前に、私たちは、こうした体験をどのように受けとめているのかを確認していくと、「自分が何者であるか」「今まで何をしてきたかではなく、どんな態度で生きてきたか」がハッキリするのである。

目的を達成したり、課題を解決することではなく、苦しみのなかで人間がいかに生き、決断するか、こうしたことがスピリチュアルなものが目覚める機会になるのだが、それは自分を越えていく体験である。スピリチュアルケアを探究する窪寺俊之はスピリチュアリティの特徴の一つを「魂の故郷の力」と呼び、「魂の故郷には、自己肯定、自己回復という癒しがあります。慰め、励まし、希望の自己回復があります」（窪寺 2017:337）と指摘する。スピリチュアルケアということが正しく理解されず、また訳語としても適切なものは見つかっていない。したがって、原理においてもスピリチュアルな側面として表現されているし、そうした側面を含めることで全人的理解ができるということは、私たちがもともとスピリチュアリティを有していることになり、不安や孤独といった人間的な体験がスピリチュアリティを目覚めさせるのである。ただし、ここで注意しておきたいのは、スピリチュアルな「側面」(aspect)という理解では、他の心理的、社会的な側面などと並列的（水平的）な関係にあるように受け取られるからである。スピリチュアルなものとは、眠っているものを目覚めさせて乗り越えるという意味で「垂直の関係」(窪寺 2017:336)となり、そのためスピリチュアルな次元 (dimension)⁶⁾ とする方が適切であるし、その意義を明確にできる。

ソーシャルワーク実践は、生活の問題を通して人の生きづらさにかかわる。そこでの問題は、病気によって学校にいけない、失業して生活に困っている、大切な人を事故で失ったなど、多くの場合に文化的・社会的次元での出来事がもとにあり、生物的、心理的、社会的、文化的側面からの支援が行われる。そのため、ソーシャルワーカーは社会資源やネットワーク等を活用しながら、心理・社会的な側面などへの支援することが求められ、またできることによって評価されて

いる。しかし、その経過において、先に示した人間的体験からクライアントが「スピリチュアリティに目覚め、自分が新しく生まれる体験をする機会である」（佐藤 2020:144-146）ことが見失われていた。そのため、スピリチュアルな側面が正面から取りあげられることは稀であったし、関心も低かった。なぜ、今日においてスピリチュアルな側面が注目されるのか、その点を再確認する必要がある。

すでに前文において検討したように、人間の尊厳を尊重することは永遠の課題であり、人間の価値をどんな点に見出すのか、何をもってして平等というのかといったことを基本に据え実践するには、従来の科学的、専門的なアプローチだけでは不十分なことが多々現れているからである。そこで必要となるのが、スピリチュアルな側面を含めた全人的な理解であり、実践におけるかわりである。ただし、そのためには大きな視点の転換が必要になる。科学の求める効用性や対象として目に見えるものだけではなく、個性や独自性を尊重し、対象とはならない目に見えないものを見えるようになることである。そのように人間を理解し、支援することは、どんな実践を生み出すことができるのだろうか。

地域でホスピスケアを実践する山崎章郎は、スピリチュアルペインからスピリチュアルケアを次のように定義している。

スピリチュアルケアとは、その人が直面している、さまざまな困難に具体的に対処しつつ、傾聴を通して、スピリチュアリティがその特性をはっきりするために必要な、その人にとっての真に拠り所となる他者を見出すことを支援すること、あるいはまた、支援者自身が、その人の真によりどころとなる他者として出現することである」（傍点佐藤）

スピリチュアルな側面を含めた全人的理解をし、実践することによって、クライアントが真に拠り所となる他者を見出したり、またソーシャルワーカーが真に拠り所となる他者になることができる。ただし、そのためには自身が安全、安心な場において支援するのではなく、自らの殻から出て行き他者と向き合うことが必要となる。真に必要な時に動けるかが問われるのだが、まさしく良心が問われるときであり、私たちがソーシャルワーク実践を通して人間になれるかを試されているのである。

注

- 1) 実践における支援者の倫理的対応の事例としては、下記のものを参照されたい。

佐藤俊一（2020.07）「看護職の倫理綱領について Vol.14 矛盾をいかに生きるか」看護ちば 134 千葉県看護協会

- 2) こうした事情の背景として、歴史心理学の視点から人間の理解を行うヴァン・デン・ベルグは、近代において人間が「複数的実存」になったことが、大きく影響していると指摘する。van den Berg, J.H. (1968) *Divided Existence and Complex Society, An Historical Approach*, Duquesne University Press (=1980, 早坂泰次郎訳『引き裂かれた人間 引き裂く社会』勁草書房)

- 3) 宮城洋一郎「日本社会福祉史における前近代と近代をめぐる課題～長谷川匡俊先生の研究に学ぶ」第23回淑徳大学社会福祉学会2013年11月30日からヒントを得た。
- 4) たとえば、日本看護協会の看護業務基準（2016年改訂版）においては、1－2 看護実践の内容 1－2－1 看護を必要とする人を、身体的、精神的、社会的、スピリチュアルな側面から支援する。と示されている。
- 5) 非暴力の「片膝立ち」広がる 米反人種差別デモに共感の警官も 略奪批判、静かに抗議
<https://mainichi.jp/articles/20200602/k00/00m/030/239000c> 毎日新聞 2020年6月2日
- 6) ただし、本論文においては、倫理綱領と整合性をもたせるため「側面」と表記していることをお断りしておく。

文献等

- Buber,M. 1948, Das Ploblem des Menschen,Verlag Lambert Schneider, Heidelberg =1961, 児島洋訳『人間とは何か』理想社
- Frankl,V. 2005, Ärztliche Seelsorge, Grundlagen der Logotherapie und Existenzanalyae, Zehn Thesen über die Person 11, überarbeitete Neuauflage =2011, 山田邦男監訳『人間とは何か―実存的精神療法』春秋社
- Fromm,E. 1947, Man for Himself, Holt Rinehart and Winston =1972改訳, 谷口隆之助・早坂泰次郎訳『人間における自由』東京創元社
- 1963, The Dogma of Christ, Holt Rinehart and Winston =1965, 谷口隆之助訳『革命的人間』東京創元社
- 1966, You shall be as gods, Harper & Row =2010, 飯坂良明訳『自由であるということ―旧約聖書を読む』河出書房新社
- 窪寺俊之 2017『スピリチュアルケア研究―基礎の構築から実践へ』聖学院大学出版会
- Kwant,R. 1961, Penomenology of Social Existence, Duquesne University =1981, 早坂泰次郎監訳『人間と社会の現象学』勁草書房
- 佐藤俊一 2020『スピリチュアリティを目覚めさせる―均質化する社会を現象学から問う』川島書店
- 谷口隆之助 1962『疎外からの自由―現代に生きる知恵』川島書店
- 2000『続聖書の人生論―贈られてあるいのちのまに』川島書店
- ソーシャルワーカーの倫理綱領（日本ソーシャルワーカー連盟）
(<http://www.japsw.or.jp/syokai/rinri/sw.html>)
- 山崎章郎 2017「スピリチュアルペインとケア」スピリチュアルケア研究VOL.1 53-61 日本スピリチュアルケア学会

Fundamental Ethical Issues in Social Work: The Conscience Responds

Shunichi SATO

This essay attempts to clarify the fundamental ethical issues in social work, which can become common ethical concerns for modern interpersonal professions. This is because ethics is a matter of conscience, rather than a code of conduct for professionals in a certain field.

This essay will address from the phenomenological perspective the three keywords explicated in the preamble to the revised Social Worker Code of Ethics—concerning human dignity, the existence of value, and understanding of equality—and attempt to shape them into implementable ideas for social workers. We examine to realize human dignity and respect for diversities, collective responsibility, spiritual aspect as shown in the principles by considering basic human understanding, coexisting personal and societal relationships and argue that the awakening of spirituality is necessary to support social work for addressing fundamental issues.

Keywords: Irreplaceable Existence, Uselessness, Dimension of Existence, Collective Response,
Awakening of Spirituality